

**2 斑点米カメムシ類の防除対策**

**ねらいと成果**

1999年度産米において斑点米が検査等級格落ちの最大要因となったため、防除対策の確立が緊急の課題となった。そこで、カメムシ類が多発しやすい早期イネを対象に薬剤試験を実施し、カメムシ類に対する防除効果と斑点米の発生防止効果を検討した結果、乳熟期、糊熟期にシラフルオフェン粉剤 DL を 2 回散布するとカメムシ類に対して効果が高く、斑点米発生率が無散布区の約 4 分の 1 に抑えられることが明らかとなった。

**内 容**

**1 試験方法**

水上郡青垣町においてコシヒカリ（田植え：5月3日。出穂期：7月27～28日）を対象に薬剤 2 回散布 A、B 区、1 回散布 C 区、無散布区を設置し、A 区は 8 月 7 日（乳熟期）および 17 日（糊熟期）にシラフルオフェン粉剤 DL、B 区は 8 月 7 日に MPP 粉剤 DL、17 日に MEP 粉剤 DL、C 区は 8 月 7 日にシラフルオフェン粉剤 DL を、いずれもナイアガラホースを使用して 10 アール当たり 4 kg 散布した。

カメムシ類の調査：8 月 7 日（第 1 回散布前）、8 月 8 日（散布 1 日後）、8 月 17 日（第 2 回散布前）、8 月 18 日（散布 1 日後）に圃場中央部において捕虫網により、すくい取り 20 回振りをおこない、捕獲されたカメムシ類を種類別に調査した。

斑点米の調査：8 月 31 日に各区とも圃場中央部より 100 株を選び、1 株について 2 穂、計 200 穂を抜き取り、自然乾燥させた。その後、9 月 12 日に脱穀、

初すりを行い、ライスマシンで 1.8mm 以上の粒厚の玄米について斑点米数を調査した。

**2 試験結果**

試験区に生息するカメムシの種類はクモヘリカメムシ、およびアカスジカスミカメを主としたカスミカメムシ類が多く、そのほか、トゲシラホシカメムシ、シラホシカメムシ、ホソハリカメムシなどが認められた。

クモヘリカメムシに対し、シラフルオフェン粉剤 DL の効果は高く、長期間密度を抑制したが、MPP 粉剤 DL の効果持続期間はやや短く、散布 10 日後には散布前密度より増加した。また、カスミカメムシ類はいずれの供試薬剤にも弱く、第 1 回散布後以降は長期間低密度で経過した。斑点米発生率についてみると、無散布区が 1.43% と高率であったのに対し、散布区は 0.31～0.61% と、いずれも低率に抑えることができた。

近年、イネ栽培ではカメムシ類対象の薬剤散布は省略されることも多かったが、薬剤による防除を実施することによって斑点米の発生をかなり低下させることが可能である。

**今後の方針**

乳熟期は薬剤の第 1 回散布時期としてやや遅いと考えられるため、穂揃い期を第 1 回目の散布時期とした薬剤試験の実施と、増殖場所となるイネ科雑草を除去することにより、斑点米発生率のより一層の低下を図る。

廣瀬 敏晴（中央農技・環境部）

表 カメムシ類の密度と斑点米発生率

区	散布回数	散布薬剤（散布月日）	種 名	調 査 月 日				斑点米発生率（%）
				8/7	8/8	8/17	8/18	
A 区	2	シラフルオフェン粉剤 DL (8/7) シラフルオフェン粉剤 DL (8/17)	クモヘリカメムシ	6.2	0.4	0.0	0.0	0.31
			カスミカメムシ類	3.0	0.4	0.0	0.0	
			その他	2.4	0.4	0.2	0.2	
B 区	2	M P P 粉 剤 D L (8/7) M E P 粉 剤 D L (8/17)	クモヘリカメムシ	4.0	0.0	17.0	0.0	0.42
			カスミカメムシ類	14.0	0.0	0.0	0.0	
			その他	4.0	0.0	1.0	0.0	
C 区	1	シラフルオフェン粉剤 DL (8/7)	クモヘリカメムシ	5.0	0.0	1.0	0.0	0.61
			カスミカメムシ類	6.0	0.0	0.0	0.0	
			その他	1.0	0.0	0.0	0.0	
無散布区	-	-	クモヘリカメムシ	5.0	12.0	12.0	6.0	1.43
			カスミカメムシ類	1.0	6.0	1.0	1.0	
			その他	2.0	0.0	0.0	0.0	

数値は 20 回振り平均虫数